

組織の財務改善・強化を図るための社会との関係性を考える

2009年度 第1回 2009年8月12日(水)

講師: 小林 由紀男 NGO組織経営アドバイザー

【学習目標】

日本の中小規模NGOの経営課題（特に社会との関係性と財務強化）について考え、参加者間で共有する。

非営利団体の存在意義

非営利団体の存在意義は、「グローバル社会」の急激な進行の弊害として生じた、貧富の格差、環境破壊などといったグローバル・イシューへの対処にある。国家行政の手が届かない隙間を埋め、遅れを補い、問題を補正するのがNGOである。NGOの多くは目の前にある問題に対する行動から始めている

ため、ミッションについて自覚的でない場合もある。しかし構造的に見れば、非営利団体は社会的課題に責任を持つ「市民からの負託」を受けて行動しているものであり、「公益」を目指すものである。

慈善活動と社会の倫理

欧米型の慈善(チャリティ)と日本型社会貢献活動について考えてみたい。まず、欧米型のチャリティはキリスト教精神に基づく行動であり、何か良いこと「善」のために浄財を市民に募る。この「善」が何かについては宗教的なものであり、俗人の介入する余地はない。人は神の祝福に対する義務として「善」を行う。

一方、日本型の社会貢献活動における「善」は人間社会の判断に基づく。日本型の社会貢献とは、企業活動が利益を生み出し、それを社会に還元することによって社会が活性化され、そのことによって企業の繁栄が継続的に持続するという循環を目指すものである。

NGOのプロジェクトと市民社会

NGOの場合、市民の中の社会問題を解決する意欲と能力のある人間がNGOを形成している。義務ではなく「ボランティア」精神がその基底にある。よって、市民一人ひとりが、その負うべき社会的責任や義務を自覚したとき、NGOを支援する動機が生まれる。

一方、NGOはその活動が「公益」にかなっていることを市民に示す必要がある。NGOのミッションは「フィリピンで学校が必要だ」といった、誰にでも理解できる「これがあつたら社会が良くなる」というものを示す「要求ガイド」である。また、「良いことをやっているのだから分かってくれる人たちだけで素朴にやってほしい」、という気持ちは分かるが、それだけではNGOは成立

しない。効率性、環境性、有効性、成果責任、獲得価値、倫理といった要素を含む「総合価値指標」を考え、広く市民にその公益性を問う必要がある。さまざまな社会的要求をバランスよく満たすことで市民の信頼を得ることができるのである。

講師紹介



小林 由紀男 (こばやし・ゆきお)
NGO組織経営アドバイザー